

# からかい意図の感動詞 — 日中両国語の日常会話における用例分析 —

郭 蓉菲\*

## An analysis of examples from daily conversions between Japanese and Chinese

Rongfei Guo\*

It is said that interjections do not have any independent meanings. They are used intentionally to some degree. And they will get some meanings when the speaker wants to inform the other party about his/her psychological condition. This study talks about teasing interjections based on an analysis of examples from the daily conversations between Japanese and Chinese. In Japanese, the teasing interjections include "kora""ya-i""hora""maa""you""iyu""hee""sora""oyaoya" and so on. In Chinese, the teasing interjections include "you""ha""hei""aya""aiya""haiya""he" "ya""yi""hai" and so on. The difference in the teasing interjections of the two countries is as follows. In both languages, the teasing interjections usually appear at the beginning of sentences, although in Japanese they could also come at the end. The interjections of both countries are always used on surprising and warning occasions, but sometimes they have a different purpose, that is to tease according to different occasion. Also, they are sometimes doubled or combined to express teasing intent.

Keywords: Japanese teasing interjections, Chinese teasing interjections, analysis of examples, comparison

### 1 はじめに

周知の通り、どの国の言葉においても、感動詞がたくさんある。日本語ならば、例えば、「ああ」とか、「うん」とか、「おい」などがある。中国語ならば、例えば、“啊”とか、“哦”とか、“哎”などがある。日常の言語生活を見ると、「ああ、いいお天気ですね」、「あつ、素敵」、「これはこれは、ありがとう」など、感動詞が頻繁に出て来る。これらの感動詞類を「入出力制御系」としたのは田窪である（注1）。入出力制御系という用語は感動詞類を基本的に対話相手が言ったあるいは伝えた内容を自分がどのように処理したかを示すものとして捉えたものである。さらに、

---

\* 教養部

\* 中国 中南大学外国語学院

彼は2005の説において、「感動詞は本来意味を持たず、それらのある程度意図的に発することで、自分の心理処理状態を相手に知らせることで意味が生じると考えるのである。…感動詞の特徴はそれが文と似た性質を持ち、その次に続く文の発話行為、あるいは、心的情報処理の前触れとして、機能しているのではないかと指摘した（注2）。従って、発話解析の際は、感動詞のあとに来る文だけでなく、その感動詞が与えてくれた情報も一緒に考慮に入れなければならない。さまざまな発話の場面によって、感動詞もさまざまな意味が生じる。たとえば、感動、驚き、からかいなどの発話者の意図が相手に伝わる。また、聞き手も文の前に現れる感動詞によって、発話者の意図が予測でき、先読みが可能になる。小論では発話の場面における発話者のからかいの意図を含む日中両国語の感動詞について考察していきたい。

## 2 からかい意図の伝わる感動詞—日本語の日常会話において

からかいの意図が伝わる感動詞は日常会話の中でよく見かける。これらの感動詞は相手をからかったり、嘲弄したり、冗談を言って困らせたり、なぶりものにしたりする言葉使いの中に現れる。いったい日本語において、どのような感動詞がからかいの場面によく出て来るのだろうか。これから具体的な会話文を見ながら、その様相を探ってみたい。

まず、次の例文を見てみよう。

### （1）－「こら」－（注3）

A：（サッカーの話の続き）（スマイル）見てもさー、分かんないじゃん。やっぱりさー、ある程度サッカーやった人じゃないと、あれうめえとか思わないじゃん。

B：（スマイル）（ニヤニヤして2人を見回しながら）じゃあー、090-\*\*\*\*-\*\*\*\*（カメラを見る）。よしー。

A：何が？

B：（スマイル）俺の電話番号。

A：（スマイル）はははは（笑）、ばかじゃねえのお前。

B：（スマイル）（会話に加わることなく食べ続けているCに向かって）（スマイル）お前は食ってばっかりか、こら。

C：…女の子いないと喋る気（スマイル）しない。（笑）

A：（スマイル）あははは（笑）、ひっでえなー。

…

上の会話文に出て来る人物のA、B、Cはみんな男の子である。いずれも高校時代の同級生で、サッカー部のメンバーである。現在も、3人とも社会人サッカーチームに所属。他の2人がこの日、Aの出身大学に遊びに来ており、3人が校庭の芝生に座って昼食を食べている時の会話文である。AとBがしばらく会話を続ける中、黙々とフライドチキンを食べているCの態度を見たら、「お前は食ってばっかりか、こら。」と言ったのである。この話はCを咎めているように思われがちであるが、実際、その口調は

スマイルや笑いなどによって和らげられ、Cをからかったりすることになる。Cもこの遊びとしての咎めを冗談のように認識して受け入れ、「女の子いないと喋る気（スマイル）しない。」と相手の話に応じたのである。文末の「こら」は感動詞で、この場において、相手をからかう語気めいてくるのではないだろうか。

(2) - 「やーい」 -

「いくら威張っても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。」

これは夏目漱石の小説『坊ちゃん』の中に出て来る会話文である。坊ちゃんは小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間程腰を抜かした事がある。なぜそんな無茶なことをしたか、その理由は一人の同級生に冗談に「いくら威張っても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。」と囃されたからである。話し手の同級生は二階から首を出している坊ちゃんを見て、本当に二階から飛び降りてほしいというつもりで言ったわけではない。もし坊ちゃんがそんな高いところから飛び降りたら、相当危険なことで、きっと大変なことになると話し手は思っているに違いない。なぜ上記の言葉を言ったのかというと坊ちゃんの弱点を指摘するつもりではなく、実際、坊ちゃんの威張りにこだわって、遊び半分で、彼の強がりを少しでも弱めようとして、坊ちゃんをなぶったり、からかったりするつもりなのである。文末の感動詞の「やーい」はここでは、からかい意図の感動詞として考えられる。

(3) - 「ほら」 -

...

「君の親戚の学生と云うのも、その女と何かあったのかい？」

「いや、そりやどうか知らないが、友達のうちに二三人はあるそうだよ」

「止せ、止せ、河合が心配するから。——ほら、ほら、あんな顔してるぜ」Tがそう云うと、みんな一度に私を見上げて笑いました。

「なあに、ちょっとぐらい心配させたって構わんさ。われわれに内緒でそんな美人を専有しようとするなんて心がけが怪しからんよ」

「あはははは、どうだ河合君、君子もたまにはイキな心配をするのもよかろう？」

「あはははは」

...

これは谷崎潤一郎の小説『痴人の愛』の中に出て来る会話文である。主人公河合譲治の奥さんであるナオミは美人である。譲治が会社に内緒でナオミと秘かに同棲をしている。しかし、彼女が他の男とも通じていて、いちゃいちゃするとうわさがある。それを聞いた河合の三人の同僚（三人ともちゃらちゃらする男）はある同僚の送別会の帰りの河合を引き止めて、彼をあざけている場面である。深くナオミを愛してる河合はそのうわさをはじめて同僚の口から聞いて、すごく気になって、思わず痙攣のような薄笑いを浮かべたまま、口もとをぴくぴくさせたのである。それを見た同僚は、「止せ、止せ、河

合が心配するから。――ほら、ほら、あんな顔してるぜ」をはじめ、次から次へと彼をからかっていったのである。感動詞の「ほら」は急に注意を促す時に言う語であるが、ここでは、その眼前の姿に注視させる働きが先ずあり、他方、その背後に発話者のからかいの意図・心理がある。また、「ほらほら」のように、二回も重ねて、同僚のからかい意図がさらに強まって、会話文をもっといきいきとさせたのである。

(4) －「まあ」－

…

「あいつがのだめに伴奏頼んだのか―

まあ……強烈なヘタクソ同士…

せいぜいがんばるがいいさ」

…

これは二の宮知子の漫画『のだめカンタービレ』の中の会話文である。男の主人公の千秋真一は世界的に有名なピアニスト・千秋雅之と資産家令嬢・三善征子の一人息子としてフランスのパリに生まれ、幼少期もそこで過ごした。帰国子女で金持ちで、外見もいいし頭もいい。音楽に優れた才能を持っているカリスマ的存在である。が、自分にも他人にも厳しい。彼はのだめに伴奏を頼んだ人が峰龍太郎だと偶然分かって、上記の言葉を独り言したのであるが、実際分析すると「まあ……強烈なヘタクソ同士…せいぜいがんばるがいいさ」は彼がのだめと峰龍太郎に向けて発せられたのである。彼から見れば、二人の演奏レベルがまだ上手とは言えないが、二人とも才能がある。感動詞の「まあ」は普通驚いたり感嘆したりした時に発する声であるが、ここでは、「まあ……強烈なヘタクソ同士…」は発話者が感嘆しながら、二人のヘタクソな演奏レベルを嘲笑していると考えられがちであるが、その後の「せいぜいがんばるがいいさ」という言葉から、その奥際には発話者のからかい心理が見られる。それと同時に、二人に頑張ってもらいたいという発話者の気持ちも見られる。もう一つの例を挙げてみる。たとえば、日常生活中で、こんな場面がよくある。おしゃべりをしている友達同士あるいは隣同士の二人が知り合いの第三者のうわさをしていたところに、ちょうどこの知り合いの第三者がやってくるのを見た。そうしたら、「おや、まあ、うわさをすれば影とやらだよ」(注4)と第三者をからかうことがあるだろう。うわさの当人が(ここにいない)が、突然に現れたことに「おや」という意外や驚きの声が最初にあり、その後に「まあ、うわさをすれば影とやらだよ」というからかいの感情が発する。或いはからかい意図が顕現する。ここでも「まあ」には発話者のからかい意図が伴っていることが分かる。

(5) －「よう」－

…

黒崎：よう、吉岡！

吉川：吉田で…… 吉川です。

黒崎：(スマイル)

吉川：(スマイル)

...

上は映画「クロサギ」の中に出て来る場面である。男の主人公の黒崎と女の主人公の吉川氷柱とは隣同士である。吉川は黒崎のことが好きである。黒崎は彼女に少し好感を持っているが、自分のすべきことは、恋愛ではなく、家族の復讐であることを自覚しており、彼女とずっと距離をおいている。彼女とばったり会っても、いつも彼女に冷淡な顔をする。また、彼女の名前もよく忘れてしまい、吉川ではなく、いつも吉田と呼んでいる。しかし、上のシーンにおいては、彼はいつもと違って、悪ふざけして、わざと吉岡と呼び、彼女をからかった。「よう」はここで、からかい語気が生じ、からかい効果に大いに働きかけていると理解できる。しかし、からかい、ふざけの背後には悪意はない。この「よう」は挨拶、呼びかけ語であり、しかも、ここでは、親しさを表している。「よう」の後には、相手をいつも呼び間違っていることに意識的であった上（ここでは）での、さらに意識的な、意図的な「吉岡」の一語がある。その黒崎の心理、親しさの呼びかけが吉川の言い間違い、修正、そしてスマイルを導き出したのである。

以上、具体的な例を通して、日本語の日常会話におけるいくつかのからかいの意図を含む感動詞について述べてきた。ほかにもまだあると思う。たとえば「いよう、今日はしゃれてるね」(注5)とか、「いよう、ご兩人」(注6)の二つの「いよう」もみんな発話者のからかい語気を伴う感動詞の例である。朝、会社で、普段あまり身なりに気を配らないのに、今日はきちんとした服装をして、きれいに化粧してきた仲のいい同僚を見て、「いよう、今日はしゃれてるね」と言う場合、相手を褒めていることは言うまでもないが、その一方、からかっている語気も推察できる。また、友達同士三人がいる中、その内の男女二人がいつの間にか恋人になっていて、親密な様子である。それをはじめて知った三人目の男は自分に黙って、付き合い始めたこの二人に「いよう、ご兩人」と言って、二人をからかう場面も想像できる。ほかに、夏目漱石の『坊ちゃん』の「へえ、不思議なもんですね。あのうらなり君が、そんな艶福のある男とは思わなかった。人は見懸けによらないものだな。…」の「へえ」とか、水上勉の『越前竹人形』の「そら、ええ旦那はんを持って、……あんたにのろけられると、嘘やと思えへんな。あんたみたいな、美し女に見そめられてる喜助はんも幸せなお人やなァ」の「そら」とか、島崎藤村の小説『破戒』の（「おやおや、銅貨を沢山くれるねえ」と銀之助は笑って、「こんなにあっては持上がりそうも無いぞ。ははははは。）」の「おやおや」などすべて発話者のからかいの意図がある感動詞だと理解できる。

### 3 からかい意図の伝わる感動詞—中国語の日常会話において

以上、日本語のからかい意図が伝わる感動詞について考察してきた。一方、中国語も日本語と同様に、日常の会話文においては、からかいの役割を果たす感動詞がある。続いて、その例文と発話の前後文脈を見ながら、一つ一つ考察していこう。

(6) — “哟” —

…魏石头在班长派完活后也叮嘱他一句：“凌凯，你刚上班，当心点啊，放炮的电线拉远点，别大意……”  
凌凯说：“哟，矿长下来了！我还没看见呢？”小伙子们又哄笑起来。…

（訳文：…魏石頭は班長が仕事のことで、彼にいろいろ指示を与えたあと、自分も一言つけ加えるのを忘れなかった。「凌凱、おまえさん久しぶりに仕事につくんだから気をつけてな。発破を掛けるときは、電線をできるだけ遠くへひっぱるんだよ。注意してな」「よう！炭鉱長！みずからお出ましかね？そこにおいでになったとは！」若い連中がどっと笑った。…）

上は陳建功の小説《蓋棺》（日本語名『棺を蓋いて』）の中の会話文である。登場人物の魏石頭は昌順炭坑の坑夫である。若いころは誰にも負けないほど機敏であり、中国全土が解放されたころには、いつのまにかこの昌順炭坑の若い坑夫たちの中で、一番の物知りと言われるようになっていた。そのおかげで、解放直後のある日、「北京に勉強しに行くんだよ。帰ってきたら幹部になってこの炭鉱を管理するのだ」と軍の代表に言われた。しかし、貧しい魏石頭はズボンがないので、義兄弟の契りを結んだ劉志に行かせた。そういういきさつで劉志が北京に行くことになったのだ。この後劉志は炭鉱長、さらには党書記に出世し、魏石頭は死ぬまで一介の炭坑夫である。もう一人の登場人物の凌凱は、学生あがりで、この炭鉱にやってきてまだ四年にしかないが、口が上手で、文章を書くのもとてもうまいので、党書記劉志の文章係を担当している。彼は以上の経緯をよく知っており、よく魏石頭をこの紅松炭鉱の炭鉱長などとかからかう。上記は彼が魏石頭を揶揄する場面の一つである。炭鉱長でもないのに、わざと彼に“哟，矿长下来了！我还没看见呢？”と冗談を言ったり、彼を困らせたりするのである。感動詞“哟”は冒頭に現れて、からかい語気を帯びていて、その後のからかい話に働きかけただけでなく、その場の雰囲気も盛り上げたりすることができたのであろう。なぜ凌凱はその話をしたのかというと、それは魏石頭に恥を掻かせようとしたのではない。魏石頭は人柄がよいし、炭鉱長までも他人に譲ってもかまわないという広い心を持っているし、面白いし、炭鉱の仲間たちに好かれているのである。このからかい話の奥には実際、凌凱の魏石頭への尊敬の念が見られる。

（7）－“哈”－

…

“哈！这模样了！胡子这么长了！”一种尖利的怪声突然大叫起来。

…

“不认识了么？我还抱过你咧！”

…

（訳文：「まあ、こんなになって。ひげをこんなに生やして！」突然、聞きなれない、カン高い声がひびきわたった。」

…

「忘れちゃったの。あたしはあんたをだっこしてあげたこともあるのよ」

…）



これは魯迅先生の短編小説集《吶喊》（日本語名『吶喊』）の中の《故乡》（日本語名『故郷』）にある会話文である。作者はよそで暮らしをしている。故郷に別れを告げるために20年ぶりに帰ったのである。なぜかと言えば、長年一族で同居してきた古い家は、すでに人手にわたすことに相談がきまって、明けわたしの期限は今年いっぱいとなっていた。だから、どうしても旧暦の元日以前に、住みなれた古い家に別れを告げ、住みなれた故郷を遠くあとにして、現在暮らしをたてている他郷へ引っ越さねばならない。故郷の旧居の筋向かいに住んでいる楊お婆さんは、久しぶりに彼に会い、彼の容貌に驚いて、上記の言葉を発したのである。その中の“哈！这模样了！胡子这么长了！”はわざと作者のことを遊び混じりに揶揄する話である。冒頭の感動詞の“哈”には楊お婆さんのからかい語気が込められていることが明らかである。しかし、ここでは、からかいの背後には楊お婆さんがわざと作者に親密さを示そうとする意図も見られる。彼女は引越しのことを聞いて、古い家具などをねだりに来るのが実際の目的なのである。ほかに、たとえば、史鉄生の小説《插队的故事》（日本語名『遙かなる大地』）の中の会話文「…“哥们儿，抽烟不？”“不抽，我不会。”“其实我也不会。”“没准儿要下雪。”“没准儿，嗯，得下。”“要不就抽一根儿。”“哈，你会！”…」(訳文：「兄弟、タバコを吸わねえか」「いや、吸えないんだ」「実はおれもだ」「雪が降るかもしれないな」「かもな。いや、きっと降る」「なんなら一本くれないか」「なんだ吸えるのか」)がある。ここの“哈”も話相手をからかう意図を含む感動詞として認められるであろう。

(8) — “嘿” —

…

“你们俩早就认识吗？嘿，可没想到。”

…

(訳文：…「あなたたち知りあいだったの、知らなかったわ」…)

この会話文は楊沫の小説《青春之歌》（日本語名『青春の歌』）に出て来るものである。陰暦の大晦日の夜、北京風の四角い窓格子に、白い障子紙を張った小部屋には十人余りの愛国青年の若い男女がびっしりと集まっていて、若々しい元気な声をあげ、さかんに議論をたたかわせている場面である。上記の話をしたのは白莉苹である。この小部屋の主人であって、親切の上に客好きである。主人公の林道静は夫と結婚してから、彼女と同じアパートに住んでいる。二人の付き合いはあまり長くないが、林道静が夫の帰省のため一人で大晦日を過ごすことになることを知って、白莉苹は彼女を自分の家に誘ったのである。初めてなので、林道静はただ周りのほかの若者の話を静かに聞いている。彼らが話している最中、ひとりの青年が部屋中の人々をびっくりさせるような声をあげながら、突然やって来た。この青年は芦嘉川である。彼は母親が病気で、見舞いに帰省したついでに、北戴河の楊村の姉に会いに来た際に、まだ楊村で小学校の教員を務めていた林道静に一度会ったことがある。今日、二人が二回目の出会いのわりに、古くからの知りあいのように話し合っているところを白莉苹に見られ、“你们俩早就认识吗？嘿，可没想到。”とからかわれたのである。“嘿”にはこの場合において、白莉苹の二人へのからかい意図が

潜んでいることが分かる。白莉華は芦嘉川と昔からの知り合いである。芦嘉川が林道静とも知り合いで、お互いに好感を持っているとは思わなかった。すでに結婚しており、あまり幸せな生活を送っていない林道静のことは彼女はよく知っている。からかいの一方、白莉華の林道静への同情の気持ちも見られる。

(9)－“啊呀”－

...

“啊呀，小姐！你快要变成大腹便便的书虫子了！人怎么能一下子消化掉这么多的东西呀？我这半瓶子醋，可回答不了你。”

...

(訳文：…「あいやあ、お嬢さま！そんなことしてると、腹ばかりふくれた本食い虫になっちまうぜ。そんなに多くのものを、一度に消化できるわけではないじゃないか。ぼくみたいな生かじりには、とても、返答ができないや」…)

この会話文も楊沫の小説《青春之歌》(日本語名『青春の歌』)に出て来るものである。林道静は芦嘉川と再会してから、芦嘉川やほかの愛国青年からたくさんの本を貸してもらって、疲れを知らずに読み始めた。何か分からないことがあると、すぐ質問する。上はその中の一つの場面である。林道静に質問されるのは愛国青年の許寧である。林道静にわかったような、わからないような質問を持ち出され、許寧は頭をふり、手をふって笑いながら、上記のことを言った。文の後半の“我这半瓶子醋，可回答不了你。”は自分のことをからかったりするが、冒頭の“啊呀，小姐！你快要变成大腹便便的书虫子了！人怎么能一下子消化掉这么多的东西呀？…”は林道静をからかう話であり、“啊呀”もここでは、からかいの意図がある感動詞として考えられる。林道静を責めていると思われがちであるが、実際、林道静の勉強ぶりとその情熱を心から立派だと思っているからこそ言ったのである。からかいと同時に、林道静への感服という話し手の心理も推察できる。

以上、いくつかの例を中心に、中国語における典型的なからかい感動詞について見てきた。ほかにもまだある。たとえば、浩然の小説《金光大道》(日本語名『輝ける道』)の中の会話文“哎呀，真是个大勤俭人。你过年都不歇着，天黑了，还不收工？”(訳文：「イヨオ！なんつう働きもんだか。正月も休まねえで、暗くなってもまあだ仕舞わねえのか」)の“哎呀”とか、史鉄生の《插队的故事》(日本語名：『遙かなる大地』)の中の“咳呀！随随说你要来哩，真格倒来了。多会儿到？”(訳文：「あれっ、随随があんたが来ると言ってたけど本当に来たんだな。いつ着いた」)の“咳呀”とか、陳建功の《盖棺》の中の“嗬，魏头儿还有这么两下子，没想到！”(訳文：「へえ、魏じいさんに、そんな芸があったとは」)の“嗬”とか、張海迪の小説《轮椅上的梦》(日本語名『車椅子の上の夢』)の中の「牛牛他们那群小小子见小闺女们围着我，便拖着草筐挤过来。“呀，小闺女就知道花，啧啧。”」(訳文：女の子たちが私をかこんでいるのを見て、男の子もこちらへきた。「チッチッ、女の子は花を摘むことしか知らないんだな」)の“呀”とか、“咦，三梆子，也不上井台子照照你那样儿，脸皮儿比那榆树皮都花花。”(訳文：「ふん、三梆子、あんたも鏡を見てきたら？ニレの幹よりまだらな顔して!」)の“咦”とか、阿城の小説《棋王》(日本語



名『チャンピオン(棋王)』)の中の「…“可惜没有调料。”脚卵说：“我还有酱油膏。”“你不是只有一小块儿了吗？”脚卵不好意思地说：“咳，今天不容易，王一生来了，我再贡献一些。”」(訳文：「残念だが汁がないな」と言うと、のっぽが言った。「固形醤油が残ってるよ」「もうひとつかけられないと言ったじゃないか」そうぼくが言うと、のっぽはぼつが悪そうに、「まあね、きょうは王一生がきたから特別だ。ひとふんぱつするよ」)の“咳”などみんなからかい語気がある感動詞であると理解できる。

#### 4 日中両国語の日常会話におけるからかひの意図が伝わる感動詞の相違点

いろいろな会話文の解析によって、日本語には、具体的な発話の場において、「こら」「やーい」「ほら」「まあ」「よう」「いよう」「へえ」「そら」「おやおや」などのからかひの意図が伝わる感動詞があることが分かった。「まあ」「いよう」「へえ」「おやおや」は普通、驚いた場合に使われる感動詞である。「こら」は他人を咎めたり、叱ったりするなどの場面の感動詞である。「やーい」は普通呼びかけや囃しなど表す感動詞である。「ほら」と「そら」は急に注意を促すなどの場面、「よう」は感動の場面によく現われる(注7)。しかし、上の会話文の場面において、全てからかい語気を伴うことになった。一方、中国語には“哟”“哈”“嘿”“啊呀”“哎呀”“咳呀”“嗨”“呀”“咦”“咳”などのからかひの意図が伝わる感動詞がある。“哟”“啊呀”“哎呀”“呀”“咦”はすべて一般的には驚きなどの場面に出て来る感動詞である。“哈”は通常得意や満足を表す場面に用いられる。“嘿”は驚きのほかに、得意がったりする場面にも使われる。“嗨”は驚嘆の場面、“咳”は驚きのほかに、悲しみや後悔の場面にも使われる感動詞である(注7)。しかし、例文の分析を通して、これらの驚きや、驚嘆、注意などはすべてからかひの意図に変わったことが明らかになった。また、日本語の場合、からかひ意図が伝わる感動詞は、一般的に冒頭に位置する場合が多いが、文末にも置かれる場合もある。たとえば「お前は食ってばっかりか、こら」「弱虫やーい」など。しかし、中国語の場合は、ほとんど文の最初に来ることに気づいた。そして、日本語の「ほらほら」(「ほら」+「ほら」)、中国語の“咳呀”(“咳”+“呀”)のように、感動詞を二重に重ねる形でからかひ意図を表す感動詞があることが明らかになった。

#### 5 終わりに

上文において、日中両国語の日常会話における典型的なからかひ意図が伝わる感動詞について一つずつ考察してきた。その相違点も一応述べてきた。日本語の場合、「こら」「やーい」「ほら」「まあ」「よう」「いよう」「へえ」「そら」「おやおや」などがある。一方、中国語の場合、“哟”“哈”“嘿”“啊呀”“哎呀”“咳呀”“嗨”“呀”“咦”“咳”などがある。日本語も中国語も冒頭に来る場合が多いが、日本語では文末に来ることもある。両方とも同じように、驚きや注意などがからかひ意図に変わる場合が多い。そして、感動詞を二重に重ねる形式でからかひ意図をも表すことができる。以上の分析から見ると、これらのからかひ意図が伝わる感動詞を使うことによって、日本人の日常生活においても、中国人の日常生活においても、摩擦を生まずにその場の雰囲気盛り上げられるだけでなく、発話同士の友情も高められ、人間関係もより円滑に進められるということが分かった。しかし、日本語の感動詞にしる、中

国語の感動詞にしる、前後の文脈や話し手と聞き手の心理状況との関連によって、そのからかいの内実が決まり、またそれぞれに濃淡も生ずる。そして、男女の違いによっても使われる傾向が異なる。これを今後の課題としてさらに考察していきたい。

#### 注釈

- 注1：田窪行則 1995年 「音声言語の言語学的モデルをめざして——音声対話管理標識を中心に」『情報処理』第三六巻第二号情報処理学会 1020-1026頁
- 注2：田窪行則 2005年11月 「感動詞の言語的位置づけ」 特集 感動詞—未開拓の研究領域へ 『言語』 大修館書店 14-21頁
- 注3：“水島梨紗 2006年 日本語日常会話における「からかい表現」のフレーム分析 北海道大学 日本コミュニケーション学会”の談話例を引用する
- 注4：『日中辞典』1987年4月1日 北京・对外経済貿易大学・中国商務印書館・小学館 共同編集 1764頁
- 注5：『日中辞典』1987年4月1日 北京・对外経済貿易大学・中国商務印書館・小学館 共同編集 130頁
- 注6：『詳解日中辞典』 昭和58年4月25日 北京外国語学校編 光生館 93頁
- 注7：ここに挙げられた日本語の感動詞のよく使われる場面はすべて『広辞苑』 1955年5月25日 岩波書店」を参考する
- 注8：ここに挙げられた中国語の感動詞のよく使われる場面はすべて『中日辞典』第2版大活字版 1992年 北京商務印刷館・小学館 共同編集」を参考する

#### 例文出典

本論文の小説の例文はすべて北京日本語研究センターによって開発された日中対訳コーパスから選んだものである

本論文に出てきた日本語の小説：

- |         |         |            |
|---------|---------|------------|
| 1 夏目漱石  | 『坊ちゃん』  | 出版社 新潮社 CD |
| 2 谷崎潤一郎 | 『痴人の愛』  | 出版社 新潮社 CD |
| 3 水上勉   | 『越前竹人形』 | 出版社 新潮社 CD |
| 4 島崎藤村  | 『破戒』    | 出版社 新潮社    |

本論文に出てきた中国語の小説：

- |       |         |               |
|-------|---------|---------------|
| 1 陈建功 | 《盖棺》    | 出版社 华夏出版社     |
| 2 鲁迅  | 《故乡》    | 出版社 人民文学出版社   |
| 3 史鉄生 | 《插队的故事》 | 出版社 中国盲文出版社   |
| 4 楊沫  | 《青春之歌》  | 出版社 北京十月文艺出版社 |
| 5 浩然  | 《金光大道》  | 出版社 北京人民出版社   |
| 6 张海迪 | 《轮椅上的梦》 | 出版社 中国青年出版社   |
| 7 阿城  | 《棋王》    | 出版社 四川文艺出版社   |

#### 参考文献

- 1 佐藤郁良 2009年10月 「郁良と楽しく文語文法(22)連体詞・接続詞・感動詞・敬語」 俳句58 (11) 102-106頁

- 2 春木茂宏 2006年7月 「アイロニーの記述的研究(3)―賛辞、世辞、からかいとの比較―」 文学・芸術・文化 18巻1号 39―69頁
- 3 水島梨紗 2006年 「日本語日常会話における「からかい表現」のフレーム分析」 北海道大学 日本コミュニケーション学会
- 4 田窪行則 2005年11月 「感動詞の言語的位置づけ」 特集 感動詞―未開拓の研究領域へ 『言語』 大修館書店 14―21頁
- 5 富樫純一 2005年11月 「「へえ」「ほう」「ふーん」の意味論」 特集 感動詞―未開拓の研究領域へ 『言語』 大修館書店 22―29頁
- 6 定延利之 2005年11月 「「表す」感動詞から「する」感動詞へ」 特集 感動詞―未開拓の研究領域へ 『言語』 大修館書店 33―39頁
- 7 小池清治 細川英雄 小林賢次 山口佳也編集 2002年10月10日 『日本語表現・文型事典』 朝倉書店 66頁
- 8 河上誓作 1998年12月25日 「アイロニーの言語学」 待兼山論叢 第32号 大阪大学文学部 1―16頁
- 9 田窪行則 1995年 「音声言語の言語学的モデルをめざして―音声対話管理標識を中心に」『情報処理』第三六巻 第二号 情報処理学会 1020―1026頁
- 10 西山佑司 1983年2月発行(597) 「アイロニーの言語学」 理想 記号論2〈特集〉 2―15頁

(平成22年3月31日受理)